



俺と奴隷と異世界ぐらし

助けた奴隷の少女はあなたにゾッコン!

異世界ワンチャンで
奴隷ちゃんとイチャラブライフ♡

基本枚数15枚
ストーリー差分109枚

俺と奴隷と異世界ぐらし





異世界といえは冒険と美少女だろう。

まあ、仮に『冒険』って部分が削ぎ落ちたとしても、
傍らに可愛い異世界美少女がいるだけで
異世界召喚それ即ち勝ち組であることの証だと
断言してもよかった。

それなのに、この交易都市に辿り着くまで
寒村とお年寄りばかりときたもんだ。

本当に何度帰ろうと思ったことか。
いや、帰れないんだけど……。

しかし、その鬱気も昨日、
生まれて初めて目の当たりにした
奴隷市場の様子が清々しいまでに払拭してくれた。

市場は大通りを抜けたところ、
石造りの棧橋の下で行われていた。

主に労働力として買われていくだろう
男奴隷の競りはそれなりの賑わいをみせていた。

買い手はその身なりから
庶民風の者たちが中心。。。
恐らく農耕や炭鉱などで使う奴隷なのだろうと思う。

そして、少し離れたところに
俺も目当てとしている女奴隷の市場があった。



その一角だけは雰囲気が違う。

鎖に繋がれていたのは誰も彼も若い女の子ばかり。
両足を開かされ、買い手を誘うように仕向けられていた。

——間違いない。性奴隷だ。

「うお、あの子可愛い……」

彼女ヘルテVを見た瞬間、
声を出さずにはいらなかった。

金髪、褐色の肌、整った顔立ち、そして……おっぱい！
あんな子に毎日の相手をしてもらえたらと
妄想するだけで、人目をはばからず勃起してしまう。



だが、奴隷の相場ってどんなんだ？

この都市に辿り着くまでの旅で散々魔物をぶっ倒し、
例えこの町の高級宿屋であっても
何泊しようが問題ないくらいには稼いではいたのだが、
それが人となると皆目見当もつかない。

丁寧に値札でもぶら下がっていたなら
ありがたいところなのだが、

どうやら奴隷商人と口頭での掛け合いが基本のようだ。

やっぱり人一人を買うとなると
結構な額がするんだろうか……。





既に買う気満々でたぎっている俺にとって
「お金が足りません」の
おあずけだけは我慢ならない。

いつそ近場のダンジョンの最下層を目指そうか。
半日もあれば事足りるはずだ。

いやでも、もたもたしているうちに
あの金髪ちゃんが売れてしまったら……。

悶々と考え棒立ちする俺を退けて、
肥えたまさしく富豪って
感じのおっさんがルテの前へとズカズカ歩み寄った。

「これはこれはゴザレ様」

「今日はまた随分と変わり種ばかりだな」

ルテの顔を今にも舐め回さんばかりに近々眺める。

「新大陸の奴隷か。。。ふん、汚い肌の色だ」

——なに!?

俺は思わず声を上げそうになった。
だが、たしかにこの世界では初めて見る褐色の肌。
太陽で焼かれたイカツイ戦士でさえあは見えない。



「だが、顔立ちは悪くない……。
おい、少し試させてもらうぞ」

「もちろんで御座います！」

ゴザールと呼ばれたおっさんは
突然彼女の股座に潜り込み、
とんでもないことを始めた……。



「(味わうって、文字通りの意味かよ!?)」

それまで虚ろな眼差しでいたルテは
おっさんの奇怪な行動に
引きつった悲鳴を上げた。

「どれどれ…」

指先まで贅肉の行き渡った醜い指で
薄い布地を退けると、さも当然とばかりに
オマンコを舐め回し始める。



「あ、ああ、ああ……！」

恐ろしさの余り両膝を
ガクガクと震わせるルテを他所に、
じゅぶじゅぶとバター犬が如く
クンニを愉しむゴザール。

「いかがですか、ゴザール様」

猫なで声の奴隷商人は
両手を握っては閉じ、握っては閉じして
ゴザールの機嫌を伺っていた。



こういうのが普通なんだろうか？と
変に納得してしまう光景だった。

「うむ……。おい、商人。この娘処女ではないな？」
「（他に調べ方はなかったんですかねえ）」



そして、奴隷商人はまるで契約更新を切られそうな
営業マンのように青ざめつつ

「ええ、まあ」と短く言った後、ゆっくりと言葉を続けた。

「捕えてから商船での運搬中に、
どうやら船員たちの
慰みものにされていたらしく……」

ゴクリ……

——思わず喉がなった。

こんな可愛い子が慰みもの……

『慰みもの』だなんて、あの世界じゃ
エロゲの中のジャンル《概念》でしかなかった。
リアルにそんなことが起こりうるとか
流石異世界だぜ。



「ち……。つ。ある程度は叩かせて貰うぞ」

「は、はいーそれはもう……。ゴザール様は当商会のお得意様ですので！」

「ならいい。」

「さて、もう少し愉しませて貰おうか」

「恐怖に震えるルテの様子をこれっぽちも気に留めず、ゴザールはいきなりズボンを下ろした――。」



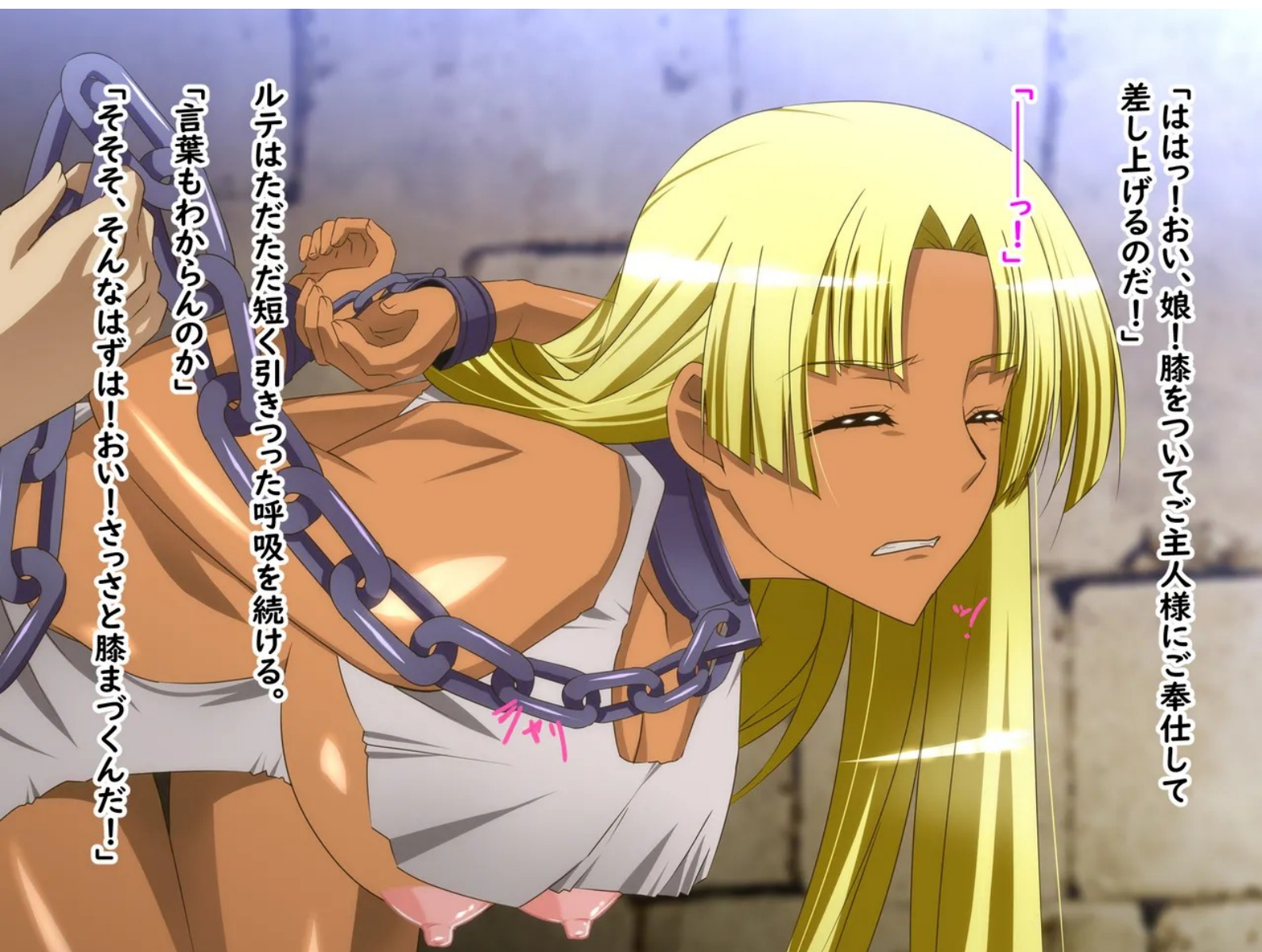
「ははっ！おい、娘！膝をついてご主人様にご奉仕して
差し上げるのだ！」

「っ！」

ルテはただただ短く引きつった呼吸を続ける。

「言葉もわからんのか」

「そそそ、そんなはずは！おい！さっさと膝まづくんだ！」



奴隷商人が鎖を無理やりに引っ張りルテを押し倒し、
ゴザールは彼女の喉奥にチンポの捻じ込む。

「うっ！　おおおおおおおお！　うっ！」

言葉にならない喉奥の悲鳴がここまで聞こえた。

「おおお、これは……」

何度もえずく彼女を尻目に、腰を振りだしたゴザール。
その表情はなかなか高揚しているようだった。



「まあ、言葉がわからなくても
こっちの相手が出来るのであれば買い取ってやるぞ」

「あああ、ありがとうございます！」

——まさにオナホール。
試供品を気に入って衝動的にポチるのに近い
感覚のように思えた。

彼女の苦しみ様子など関係なしに、ゴザールは
奴隷商人と交渉に入る。



「800ゴールドだ」

——800ゴールド!?

ゴザールの言葉に俺は飛び上がりそうになる。

「も、もうお一声!」

「810でどうだ?」

「900-ど、どうか900で!」

「...830。これ以上は出さんぞ」

頭を抱える奴隷商人を一瞥すると、

ゴザールはルテを抑えつけていた右手に力を込めて
更に深く腰を突き出した。



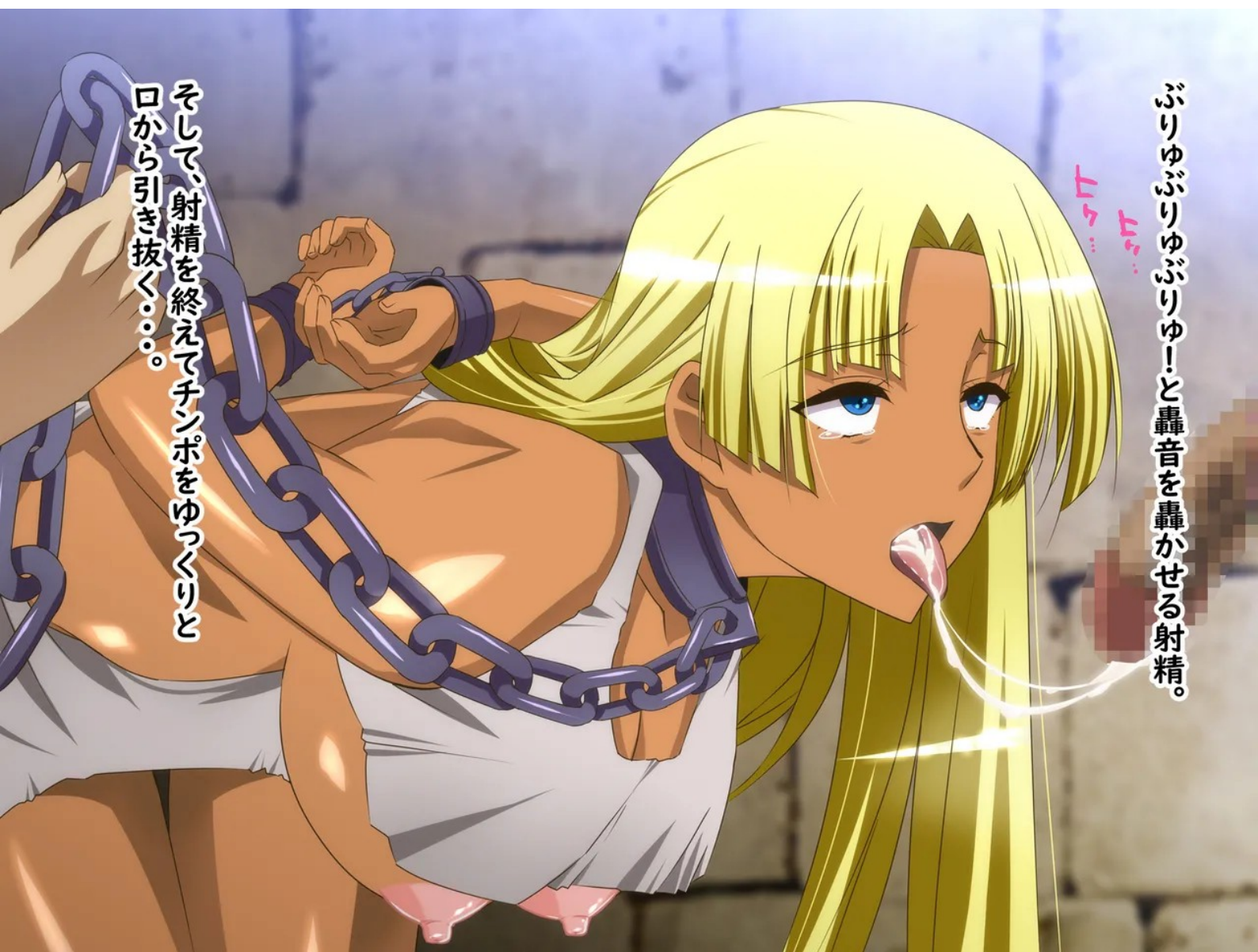


「商談成立だな。射精すぞ。」

「ご主人様との誓いの証だ。喉奥で受け止めろ」

「んんっ！ばばおおおっ！」

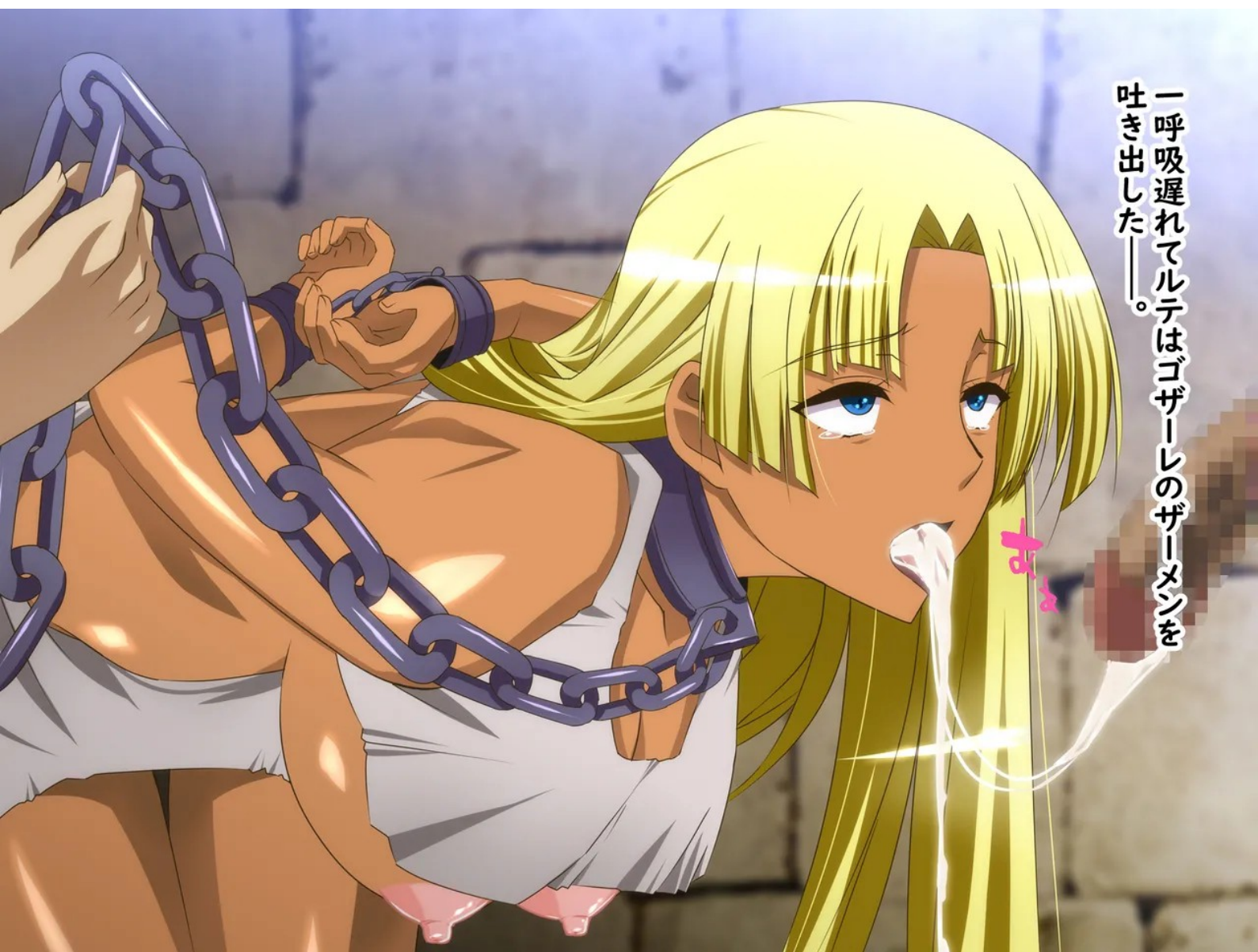
ビュッ



ぶりゅぶりゅぶりゅ!と轟音を轟かせる射精。

ゴッ...

そして、射精を終えてチンポをゆっくりと
口から引き抜く...



一呼吸遅れてルテはゴザールのザーメンを
吐き出した――。

「——はっ！」

その光景に目を奪われていた俺は、
今まさに折れた奴隷商人が鎖を手渡そうとする
ところに大声で割って入った。



「2000ゴールドだー!」

「なに!?!」

俺の声に驚いたのか、値段に驚いたのか
ゴザールがぎよっとした目を俺に向ける。

「き、貴様、今なんと言った!?!」

「だから、2000ゴールドで彼女を買うと言ったんだよ」

途端に俺たちは衆目を集める。
奴隷商人ですら俺の提示額にポカンとしていた。



ようするに俺にとって2000ゴールドですらはした金だったのだ。

：.だって、宿屋一泊200ゴールドだぞ。

美少女一人の値段が
数泊分しかないとか想像の範囲外だ。

「正気か、貴様！たかが奴隷一匹に
そんな大金を積むなど！」

この世界の貨幣価値ってまったく理解できん。。。
とか思いつつ、俺は至ってポーカーフェイスを貫く。
なんだか少し気分がいい。



「正気も正気。なあ、商人さん、どうだよ？俺に売るのが？売らないのか？」

「おおおお、お売りいたします！是非、是非いい！」

怒りに震えて拳を握るゴザールを他所に、猫なで声の奴隷商人は犬のように飛びついた。

本当に営業マンみたいだ、などと若干の同情を覚えつつも俺は晴れてルテを買い取りその場を後にしたのだった――。



多少やり過ぎた感はあるが
あれくらいの方が後から面倒を抱えずに済むはずだ。

万が一のことがあったとしても
返り討ちにしてやる。

「ご主人様、どうかなさいましたか？」

「なんでもないよ」

兎も角今は邪魔されたくないのだ。

——だって、これからエッチするんだもん！



「それよりルテ、君は言葉を話せたんだな」

「いえ…その、わたしの方こそ驚きました。
故郷の言葉をご主人様が話されて…」

合点がいった。

こちらの世界に召喚された俺には様々な
チート臭い能力が備わっていた。
言葉を理解できるのもそのお蔭だ。

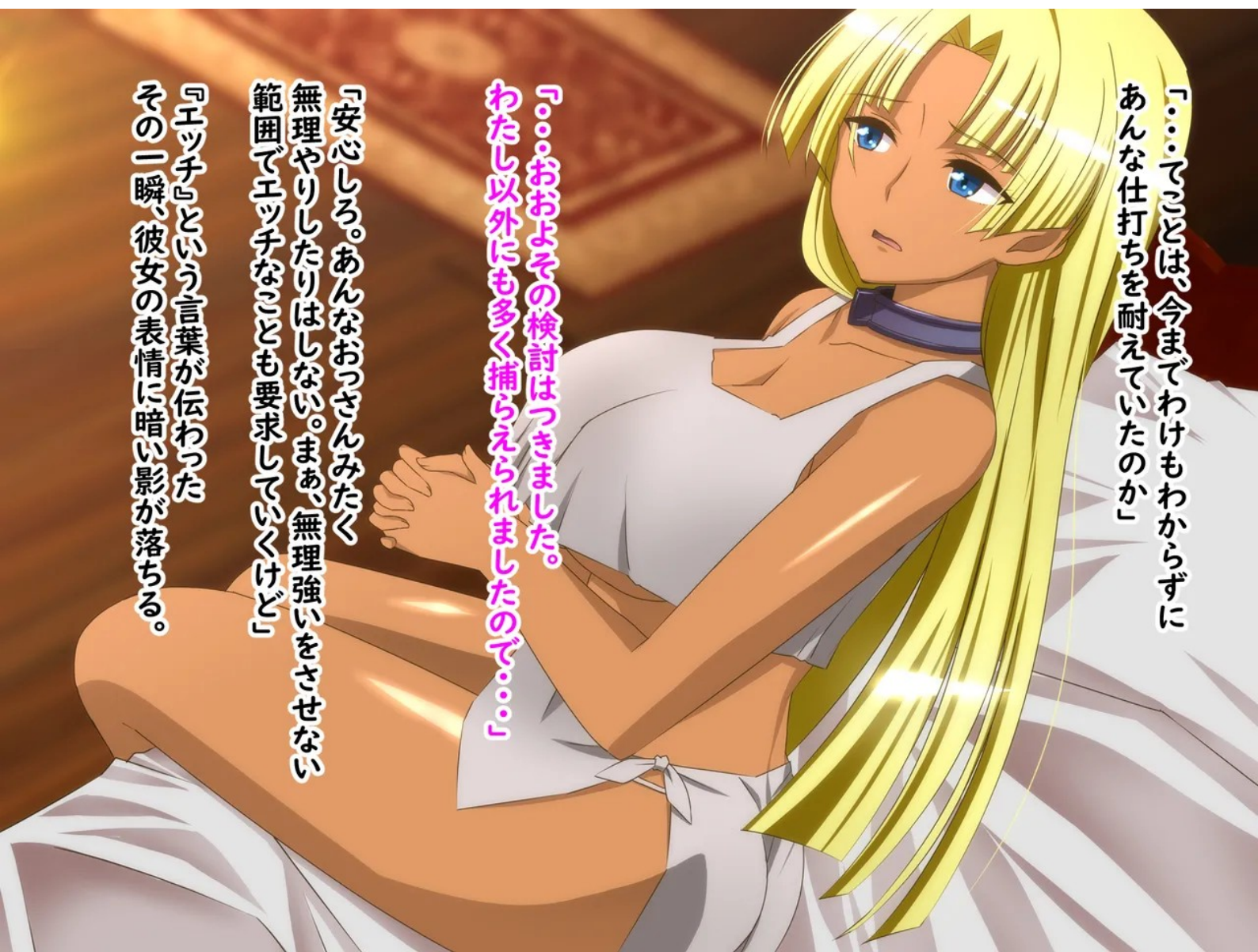


「・・・ことは、今までわけもわからずに
あんな仕打ちを耐えていたのか」

「・・・おおよその検討はつきました。
わたし以外にも多く捕らえられましたので・・・」

「安心しろ。あんなおっさんみたく
無理やりしたりはしない。まあ、無理強いをさせない
範囲でエッチなことも要求していくけど」

『エッチ』という言葉が伝わった
その一瞬、彼女の表情に暗い影が落ちる。



…仕方のないことだ。

買い手は変わっても境遇になんら変化はないのだから。

ともあれ、俺としても何も出来ないなんて
嘘はとてもしゃないが口にできない。

「やてと…」



肩に手が触れ驚くルテを軽々と持ち上げて膝の上に乗せた。

「うーん、このおっぱい最高だなあ」

「マ、ご主人様っ」

「あ、イヤならイヤってちゃんと saying してくれよ?」

ルテはしばらく考え込むようにして、
ゆっくりと口を開けた。

「いえ、どうか存分にお楽しみくださいませ」

Low Low

じゅぶじゅぶと、ワザとらしい音を立てて
彼女の乳首を頬張る。

俺の舌が乳首の敏感なところに触れる度に
ルテは可愛らしい声を上げた。

「ご主人様……その、オチンチンが
お尻にあたって……んんっ」
「おっぱいとお尻を同時に責めていくスタイルです」

「すごく……おつきなってます」
「イヤじゃないか？」

俺の二度目の質問に頬を緩ませるルテ。



「いいえ。ご主人様のように優しい方に
買って頂けて、ルテは幸せです」

「ほほお、優しい方ね。さて、どうかな？」
そう言って乳首を甘噛みしてやると、
ルテはまた可愛い悲鳴を上げる。

最高だぜ。奴隷ちゃんとイチチャラブ生活。

「おっと、そうだった。ルテ、せっかくだし
買ってきたパンを食べよう。腹空いてるだろう？」

「え、えつと。。。はい」

ほちん

Love Love

宿へ来る前に彼女には軽く食べさせたが、
まともな食事を与えられていなかったのだろう、
彼女は泣きながらスープを飲み干していた。

「あれだけじゃ足りないもんな。というか
俺も腹減ってきたし、なあ、ルテ。
口移しで食べさせてくれるか？」

「。。。口移し。はい、ご主人様」

ルテは頬を染めながら微笑む。

はちゅ

Love Love

「あむ、じゅぶ、ちゅるううう、。。。いかがですか、ご主人様」

「これやバイな。癖になりそうだ。ルテもちゃんと食べろよ」

「はい。んぐ。。。ありがとうございます。ちゅぶ、ちゅちゅ、ぶっぶりゅ」

まるで恋人同士のように、じゃれあいながら互いに口に含んだパンやチーズやソーセージを味わっていく。



「ご主人様、ご主人様」と猫のように
甘くすり寄るルテが可愛くて、
直ぐにでも押し倒しエッチしたい犯したい
欲求に駆られる。

「ご主人様、指、指があ」

ん♡

ちゅちゅちゅ

彼女の下着の中に手を入れて暖かな肉の感触を確かめる。
そこはとつくにトロトロだった。



「これからもっとエッチなことをするんだ。
ちゃんとほぐしておかないとな」

ルテはそれを了承するように
俺のチンポを右手でそっと掴んで上下にシゴき始めた。





俺が「うっ」と低く呻くと
ルテの嬉しそうに俺の瞳の奥を見つめた。

「ルテ、体洗ってくれるか？」

「はい。喜んで」

キスを交わしながら丁寧にシャツのボタンを外していき、
その手を下半身へと伸ばす。



セックス
セックス

そして、ズボンを下ろしたところで
わかり易く勃起したチンポを見つめたまま
ルテは動きを止めた。



「どうした？怖いのか？」

はぁ...
はぁ...

ザッ
ザッ

「あ、いえ...。
そうではありません。わたしのような者で
こんなに...大きくして頂いて...。
。。。ドキドキしているんだと思います」



「ビクビクして・・・いますね・・・」

チンポはルテの顔の間に飛び出し、彼女の息遣いを感じ取っては激しく脈打つ。

はぁ...
はぁ...

彼女が次にどうするか、その様子を嬉々として眺める。

「失礼します」

そう言ったのが先か指が伸びたのが先か、ルテは進んでチンポをシゴき始めた。





「う……っ」と、思わず呻き声をあげると
ルテは一瞬手を止めて俺の顔を見上げ、
そして再び手を上下に動かす。

「あ……ご主人様のお汁が先っぽから
溢れてきました。気持ちいいですね。
もし射精しそうになったら、どうぞ
遠慮なく射精して下さいませ」

甘い囁きに射精してしまいそうになるものの、俺はそこで踏みとどまる。

シュー

高まる射精感を抑えつけ、もう少しこの状況を
楽しみたいと思った。

「ルテ、お前の体を使って洗ってくれ」

「はい。ご主人様の望まれるままに」

「あの、この石鹼、使ってもよろしいのですか？」

石鹼はこの世界では高価なものだった。

というより、石鹼というものが普及していない。
炭と油を混ぜたものを石鹼の代用とするのが
一般的だが、それですら
小さな村では手に入らない代物だった。

「問題ないぞ。」

これからはお金に気を使わなくてもいい」

「ご主人様はやはりすごいお方なのですネ……。
承知いたしました。それでは失礼いたします」

ルテは自分の体に石鹼を塗り奉仕を始めた。



「んん、あ…」

体を擦り合わせ、敏感なところが触れ合う度に
ルテは愛らしい声を漏らす。

「いかが…んん、いかがですか？ご…ご主人様」

「最高だ」

最高です！異世界最高！

「ルテを買って良かったよ」

「嬉しいです、ご主人様。んあ、ああ…。
ご主人様がお望みならばどんなことでも
喜んでご奉仕いたします」



「俺はエロいご主人様だからな。すごいこと
いっぱい要求するぞ。それでもいいのか？」

「ご主人様はお優しい方です。
こんなわたしのようなみずばらしい者にも
食事を与えて下さって、
優しい言葉を掛けて下さいます」

「わたしの故郷は貧しく、身寄りもありませんでした。
ご主人様との時間はこれまでの暮らしより
ずっと人間らしいものです」

おっと。。。

そこまで言われるとは思ってもみなかった。

楽観主義者の俺にすら一人を買ったという
責任感を感じさせる。



「ルテ」

「あ、い、い、えー変なことを言ってますみません。
ご奉仕を続けさせて頂きます」

俺が自重を促したと勘違いしてルテは慌てふためいた。

「そうじゃない」と言いかけて言葉が
見当たらなくなりそれを呑み込んだ。

同情なんてかえって気を使わせるだけかなあ……。



俺は誤魔化すようにルテのお尻を握った。

「んあっ！」

「うーむ。実にいい眺めだ」

「ん、んっ！ご主人様…肌着が
食い込んで…ん、しまいますっ」

「おや？もしかして濡れていのかな？」

「はい。ルテは今、ご主人様にご奉仕して
気持ち良くなってアソコを濡らしています」



——堪らん。

なにが堪らんかといえば、ルテは気持ちを全部口にする。

それが必死で自分の価値をアピールするものだったとしても嫌な気持ちにはならない。

「ルテはエッチな女の子だな」



「嬉しいです……。わたしのような奴隷を
そんな風に言っていただけで……。
ん……。石鹼がヌルヌルして
余計に……。んっ、どうかイヤらしい奴隷に
罰をお与えください、ご主人様」

「なら、お前の顔の前でお預けを食らっている
チンポ様に、お前の喉奥を使ってご奉仕するんだ」

「はい、ご主人様」





「んん、じゅぶ、ちゅぶ、んぐ…!!
おチンポ様、いかがですか? ルテの、んちゅぶぶ、
ルテのご奉仕は気持ちいいですか?」

「(これは…ヤバイぞ。気を抜いたら…。)」

「んちゅ、ちゅるる、じゅぶぶ……
熱くて太い……。んちゅ、射精しそうになったら
構わず、喉奥で射精して下さいません」

「くっ……。くそ、流石に……。っ」

ん♡

「じゅぶ、ちゅぶぶ、んぐ、んん！
ああ、ルテの喉奥でおチンポ様の先端が膨らんで……。っ、
射精して下さいるのですね、んちゅぶぶ」



「イクぞ、もう、イキそうだ!」

「射精して下さいませ、ルテにおチンポ様のザーメンを
お恵み下さいませっ」

「イク! うっうっ! ルテ、射精するぞっ!」





「んんんっ！」

「んんんっ！」

「ん」

「んんんんんん」

俺は遂にルテの口内に欲望を吐き出す。

ドク、ドクッと汚濁が雪崩出る間も

彼女は懸命にザーメンを吸い上げようと口を離さない。

「んぐん、ごきゅん、んん、んぐっ」

「んっ！……ぐくぐくぐく……
んっ、はあ……はあ、はあ……」

「……はあ、すげえ気持ち良かった」

「んっ！」

「んっ」

「んっ！
んっ！
んっ！」

しかし、たった一度射精したくらいでは治まらない。
それどころか、あまりに従順なルテに
もっと欲望を吐き出したいという
衝動が俺の中で肥大していく。

「あ……」

ベッドに彼女を寝かせると、
肌着を両足から引き抜いた。

「このまま最後までするぞ。いいか？」

「。。。」

答えなど聞くまでもないと思っていたが、
俺の問いかけに初めてルテが言葉を吞んだ。
さっき見せた影のある表情だ。



やはり、幾ら奴隷と言えど
超えられない一線があるのだろうか。

「わたしは……」

沈黙の後、ルテがゆっくりと言葉を発した。

「わたしのような者はご主人様に
抱いて頂く資格すら御座いません」

「それってどうゆう……?」





「わたしは汚い女なのです。
奴隷として捕らえられて
ここまで来る航海の最中……
沢山の……数えきれない
男の人に……犯されました……」

ポロポロと涙を流しながら奴隷商船で、
自分の身に降りかかった惨劇を語り始めた――。

「必死で…必死でお慈悲を乞いました。
ですが、誰一人として躊躇すらなく…。
孕むまで中に射精され続けました」





「汚い部屋に押し込めて
代わる代わるわたしを犯します・・・」

『それに飽きると男の奴隷たちの中にわたしを裸で放り込んで、犯される様を見ては愉しむのです...』



「男の奴隷たちは何カ月も女たちから
切り離された生活を強制されていました。
…彼らがわたしを犯さないはずがありません」



「一日に何十人もの相手をさせられました。
そして、ことごとく膣内射精……」



「当然のように数カ月という長い航海の中で、
わたしは誰の子ともわからない
赤ちゃんを身籠りました。」



「それでも彼らはわたしを犯し続けるのです。
 ……結果、3度の流産を…経験しました」





ルテの身に降りかかった壮絶な出来事に、
こんな俺でもはつきり心が締め付けられるのを実感した。

「もう二度と・・・愛する方の子ですら
産めません・・・」

「ですから、わたしのような者を
抱いてはご主人様まで汚れてしまいます。
どうか・・・どうか、このようなわたしを
人として扱うようなことはなさないで下さい」

——そう、ルテは笑顔で言った。
「そんな悲しいこと笑って言う奴があるかよ」
俺は彼女の体にそっと指を立てる。

「この辺り……だな」

「え……」



「ヒール」

下腹部にポワッと浮かび上がった光は一瞬目の眩むような瞬きを放って緩やかに消えていく。

ポ!

「あ……あああ……!」

「言っただろ? イヤなことはイヤだと言っていいんだ。辛いことは辛いと言っていいんだ。俺にみたいにな」

「……っ!」

「っ！」

突然、ルテは俺に飛び掛かるようにして唇を塞いだ。

「んちゅーちゅうぶぶーんぐー！
ご主人様！ご主人様っ！」

「ルテは誓います！一生、この先一生ルテは
あなた様のものです！
永遠にあなた様だけの奴隷ですっ！」



「レデ、く、苦い」

「も、申し訳ございません。。。あぁ、でも、
こんな、こんな奇跡。。。」

「上手くいったと思うが、どうだ？」

「はい。お腹の。。。赤ちゃんのお部屋が、
あつたかくて、とても。。。とてもきゅんきゅんして。。。」

「お願いです、ご主人様。どうかわたしに
ご主人様の精液を注いで下さい。
もう一度、ちゃんと。。。」

「わかった」

「んんあああつ！」

急に何かを思い出したかのように溢れ出るルテの愛液。
その粘質を使って、彼女の膣へと一気にチンポを納めた。

「え、あれ」

チンポが先端がルテの膣を塞いでいた壁を突き破る。
それは紛れもない処女膜だった。



「すまん！処女膜まで再生する
つもりはなかったんだが。。。大丈夫か？」

「嬉しいです。。。こうしてご主人様を
ちゃんと受け入れられて。

痛くなどありません。こんなの痛みなどではありません」

「どうか、動いて下さいませ。
いっぱいルテを感じて下さい。。。♡」



彼女の恥じらうような言い回しに
僅かに萎えかけたチンポが今一度最大まで肥大する。

「んんんああ、お、おっきいつつ!」

ルテのイヤらしい喘ぎ声をもっと聞きたくなって、
じわじわ動きを早めていく。

「ああ、ご主人様♡んんっ!ご主人様あ♡」



ギンギンと木製のベッドが俺たちの行為に応じて軋み上げる。

ルテは繰り返し繰り返し俺を呼ぶ。同時に生き物のように蠢く膣内がチンポを溶かさんばかりに温かく包みむ。

従順なルテが可愛くて、俺は意地悪く尋ねた。

「ルテ、どこに射精して欲しいんだ？」

「中、中ですう♡お願いです♡ご主人様の精液をルテの赤ちゃんのお部屋にいっぱいお恵み下さい♡」





「イクううっ!」

「あああああ♡」

「うっ...」

♡♡♡♡♡

大量のザーメンにチンポが波打ち、
ルテの膣がドクドクと脈打つ。

「あ、ああ、ああ♡
き、気持ちいいです♡
いっぱい射精るう♡」

びゅる♡



互いにガクガクと痙攣しながら
同時に絶頂を迎えた――。

金玉が空っぽになる程の量を出しても、
しかし、俺のチンポは萎えることを知らない。

「・・・こんなにたくさん♡嬉しい♡」

「ルテ、上になって俺に跨るんだ」

「はい、ご主人様♡」



「ああ、ああ、ああ、こ、これらめれすう♡
気持ち良すぎて、んああっ♡腰砕けてしまいますう♡」

「ご主人様の命令だぞ。ちゃんと俺をイカせるまで
腰を振るんだ」

はぁ...
はぁ...

うん

たっ

たっ

すっ

すっ



「らめ、らめえ♡また、またイってしまいます♡
いったばかりなのに、こんなしゅごいのおお♡」

...♡♡
...♡♡

♡♡

♡♡ ♡♡

♡♡ ♡♡

♡♡ ♡♡



「実にけしからん奴隷だな。大好きなご主人様を
差し置いて自分だけイクのか？」

「ご主人様好き♡ご主人様あ♡」

膣内が急激に萎縮し、
再びルテが達してしまったことを物語る。



「す、すみません。ルテはまたイってしまいました♡」

理性をギリギリ保った一歩手前のような
表情を見せつつも、ルテは必死に
俺を気持ち良くしようと腰を振り続ける。



男と違って女のイッた余韻は簡単に消えたりしない。
それを承知の上で、俺は彼女の反応を愉しむ。

そして、ルテの腰を抑えつけ追い打ちを掛ける。





「ああっ！イク♡イクううう♡
ご主人様、申し訳ございません♡」

あッ♡
あ♡

しゃほ♡

しゃほ♡

ん♡

たっ♡
たっ♡

しゃほ♡

「ルテはまた、またイってしまいそうですう♡
らめえ♡イクうう♡イクううう♡」

ルテが達した瞬間、俺は堪えていた射精感を
一気に解き放ち、欲望の塊をルテの膣内に叩きつけた。

「あ、イク、イク、イク……♡あああ、止まらない♡
イクの止まりませんっ♡」

ひゅるるるるる♡

A close-up of a person's back, showing a hand resting on their shoulder. Stylized pink text is overlaid on the image, reading "ふんふん" (funfun) and "のの" (nonon). The text is written in a playful, bubbly font. The background is a warm, brownish-orange color, suggesting a wooden surface or a warm environment. The overall style is soft and romantic.

「ああああ……♡
ご主人様の精液でルテのお腹がパンパンですぅ♡」

「はあはあ……♡どうかお願い致します。
あなた様専用の孕ませ奴隷に精液をお恵み下さいませ♡」

「わたしは淫乱な奴隷です♡
もうご主人様のチンポなしでは生きていきません♡」



「ありがたく思えよ。ご主人様のチンポでお前の淫乱マシコに蓋をしてやる…ほらっ！」

「わっわっわっ♡」

「わっわっ♡」

「わっわっ♡
ちゅわっ♡
ちゅわっ♡」

ベッドが壊れるのではないかと思う程に軋みをあげ激しく揺れた。

俺はルテに気づかれぬように
コツソリとタガを外す魔法をかけていた。
「(たまには発散しないとな)」

「ご主人様のチンポ♡ご主人様のチンポ♡
ご主人様のチンポ♡
しゅきい♡ご主人様のチンポしゅきい♡」

「(異世界最高、魔法最高)」

30分前まで清廉だったルテが今や完全に俺の性奴隷。
行為の後でこのことを思い出す彼女が
どんな顔をするのか一つ楽しみができた。

「イクイクイクイク♡ご主人様、いつてますう♡
ルテの発情孕ませんマンコ、いつてますう♡
早く射精して下さいっ！壊れるう！壊れるう！」

「またご主人様より先にいったのか。
本当に淫乱なエロマンコだな」

「しゅみませんえ♡オマンコ、キモチイイ♡
止まらない、イクの止まらない♡
ご主人様♡ご主人様あ♡」

「確実に孕むように子宮口で射精してやる。
しっかり膣奥で受け止める」



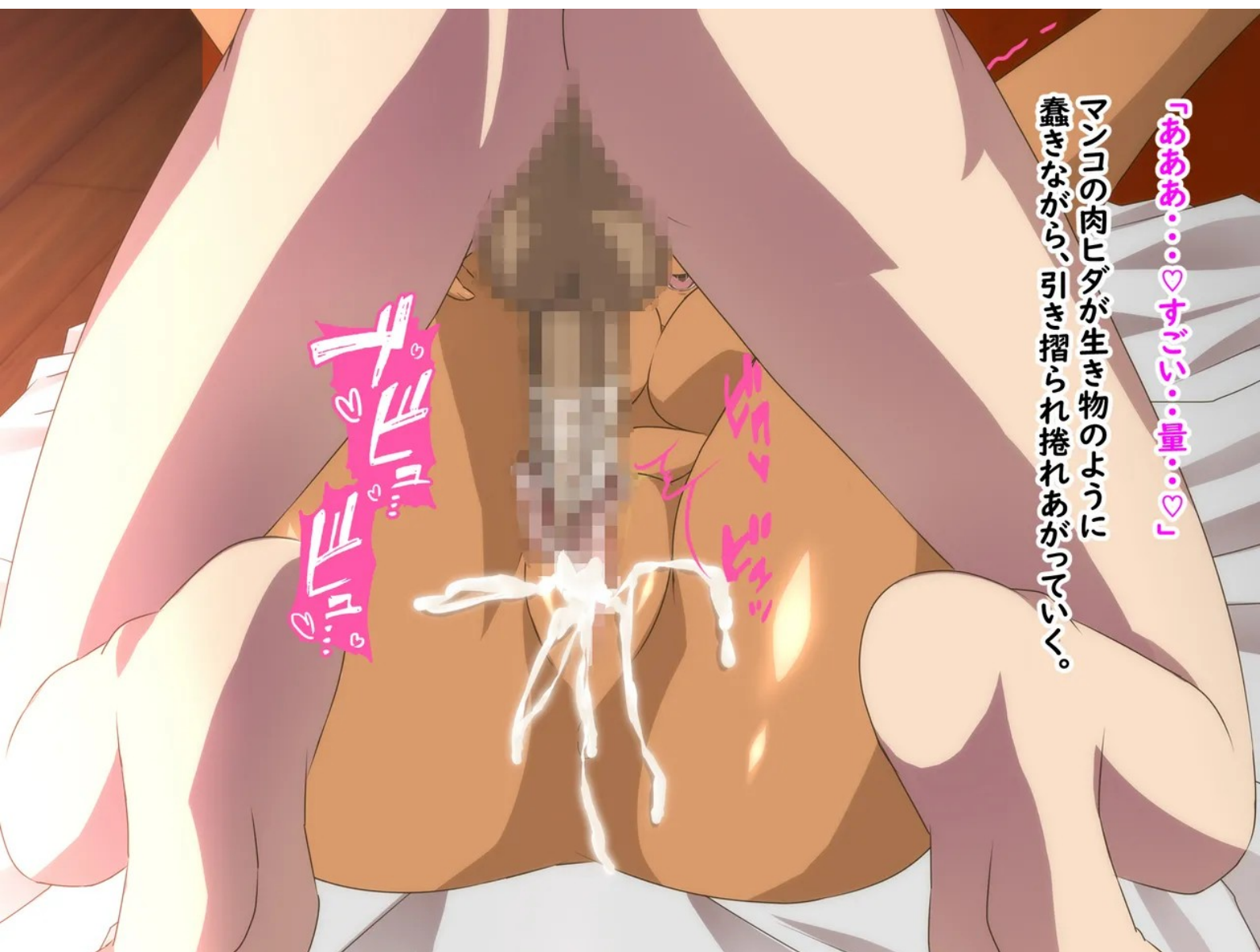




そして、その証を見せつけるようにして
ゆっくりとチンポを引き抜いていく...

「あああ…♡すごい…量…♡」

マンコの肉ヒダが生き物のように
蠢きながら、引き摺られ捲れあがっていく。



「俺のザーメンはそんじょそこらの男とはダンチだぜ。
きつと今、ルテ、お前の卵子に
早くも襲い掛かってるに違いない」

「嬉しい。。。♡こんなわたしを相手に
こんないっぱい射精して下さるなんて♡」



「ルテ、孕んだらちゃんと報告するんだぞ」

「産んでも……よろしいのですか？」

耳元の声が愛しさたっぷりに囁く。

「なんだ、イヤなのか？」

「ルテは幸せです。…今一度誓います。
ルテは永遠にあなた様のお側にいます。
どうか、お側に居させて下さい」

「ああ、当然だ。腰がガクガクになるまで
エッチして、可愛い子供をたくさん産ませてやる。
お前こそ、本当に覚悟はできているのか？」

「はい、ご主人様♡」

「ルテは幸せです。…今一度誓います。ルテは永遠にあなた様のお側にいます。どうか、お側に居させて下さい」

「ああ、当然だ。腰がガクガクになるまでエッチして、可愛い子供をたくさん産ませてやる。お前こそ、本当に覚悟はできているのか?」

「はい、ご主人様♡」

ハッ! ハッ!

「ルテは幸せです。…今一度誓います。ルテは永遠にあなた様のお側にいます。どうか、お側に居させて下さい」

「ああ、当然だ。腰がガクガクになるまでエッチして、可愛い子供をたくさん産ませてやる。お前こそ、本当に覚悟はできているのか？」

「はい、ご主人様♡」

「ルテは幸せです。…今一度誓います。
ルテは永遠にあなた様のお側にいます。
どうか、お側に居させて下さい」

「ああ、当然だ。腰がガクガクになるまで
エッチして、可愛い子供をたくさん産ませてやる。
お前こそ、本当に覚悟はできているのか？」

「はい、ご主人様♡」

「んっ♡」



俺と奴隸の朝昼晩

俺の朝は朝立ちチンポを鎮めて貰うことから始まる。

ルテは必ず俺より早く目を覚まし、
毎朝様々な方法で俺を目覚めさせてくれる。

——今朝は騎乗位。

目を開けると懸命に腰を振るうルテの姿がそこにはあった。

「はあ……はあ……はあ……♡♡♡ご主人様……お、
おはようございます。今朝のお目覚めは……んっ♡
いいかがですか？」



「最高だよ。それより疲れたら？ほら・・・」

ルテに体を預けるようにいつて甘いキスを交わす。

何度も軽イキを続けていたのだからルテのオマンコは腰を止めてもチンポとの隙間からぶりゅぶりゅと音を立てつつ愛液を垂れ流していた。

髪を撫でられうっとりとした表情を見せるルテはすっかり満足した様子だ。

しかし、俺はまだ射精していない。

ルテが疲労から目を閉じた瞬間、俺は猛烈に腰を突き始めた。





「癡猛に膣を貪るチンポはまるで獣だと言わんばかりだ。」

「♡チンポ、チンポがあああ♡」

イクイクイクイクうう♡

あ♡

しゃほ♡

しゃほ♡

耐え難い絶頂に腰を引き離そうとするも、
その度に高く突き上げ追撃を行う。

ルテは必死に絶頂を訴えたが俺のチンポはそれを許さない。

あ♡

しゃほ♡



「ザーメンをっっっっ♡イク、イクウウウウ♡♡」

ん
♡
♡
♡

チンポ

チンポ

おっぱい♡

ん
♡
♡
♡

ん
♡
♡
♡

ん
♡
♡
♡

おっぱい♡

おっぱい♡

（遂には大きく仰け反り痙攣を始めるルテ。
俺は敢えて声を殺して、唐突にイキマシコにぶちまけた。

——昼。

ついついエスカレートしてしまつて疲労で2度寝。
そして、空腹で目を覚ます。

「取り合えず何か食べたいな」

「ご主人様、パンなら少し残っていますよ」

うっかり自分まで眠つてしまつて
申し訳なさそうな顔だ。



保存の利くパンは何かと重宝する世界。

しかし、改良されたあの世界のパンより
パサパサしていて香りもなく正直マズイ。

何か飲み物が欲しいところだ。

・・・ミルクとか。

「ルテ、食べさせてくれるか」

「はい。喜んで♡」



ルテのイヤらしい体を堪能しつつ食事を摂る。

「あむ・ちゅ・くちゅ・…んん♡」

ちゅ・ちゅ・

ん♡

パンはマズイがこの感触と息遣い、唇を離れた瞬間のルテの吐息が心地良い。



このところルテの乳房は以前にもまして豊かになっていた。
ほぐすように揉みしだいた後で乳首にしゃぶりつく。

「ああん♡」

ルテは可愛らしい悲鳴を上げて俺に身を任せる。
軽く唇で乳首を圧迫すると途端に母乳が溢れ出した。

Low Low ♪



「やっぱりパンにはミルクだよなあ」

「ご主人様、おっぱいは赤ちゃんの為のものですよ♡」

「ルテは当然のように俺の子を孕んでいた」。

Love Love



「そろそろルテには女の子らしい服を買ってやって
呼び方も変えさせないとなあ」

なんだか少し寂しい気もするが、ごっこ遊びくらい
付き合ってもらうことにしよう。

Low Low b



——夜。

王都の高級住宅街に構えた二軒家から
ほんの少し離れた場所でごっこ遊びに拭ける。

ルテのお腹は日増しに大きくなる。
それもそのはず、いきなり双子だそう。

「お前はなんだ？言ってみろ、ルテ！」

「はい、わたしはご主人様の孕ませ便器です♡
ご主人様に種付けされる為に
生まれてきた性奴隷です♡」

それなりに気遣って程々に腰を動かしつつ
気持ちを高めるために会話で遊ぶ。



「孕んで産ませて孕んで産ませて・・・お前が壊れるまで
たっぷり使ってやる！ありがたく思えよ！」

「ありがとうございます♡
ルテの妊娠マンコも喜んでいきますう♡」

以前からわかっていたがルテはマゾの気が強い。

幾らかは俺を愉しませる
為の精一杯の演技だとしても
ルテ自身そのことに興奮を覚えているらしい。

うん、俺得。

「い、いちやうう♡ご主人様、いつちやいますう♡
だめ、だめえくるうう♡」

そうさういう内に、ルテは母乳をまき散らしながら
アクメを迎える。

「ひううう♡おっぱい、おっぱいとまらないっ♡」ル

「まったく。。。ご主人様より先に
イクとはけしからん奴隷だな。
まあ、なかなかいい締め具合だ。
このまま使わせてもらうぞ」



「ひいっ♡らめえ、らめえ♡オマンコイってるんす♡
おチンポじゅぶじゅぶ、らめえ♡」

ルデが倒れたりしないよう、
しっかりと体を支えてやりなが俺も射精を迎える。

「またイク♡また、イクうう♡ザーメンくるううっ♡」

今日も今日とて奴隷（嫁）とのセックスに明け暮れる。
歪の世代と言われていた俺も今や億万長者だ。

——まったく、異世界は最高だぜ。







